

A Researching Arnold Lobel through Japanese Language Teaching Materials “The Letter”

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00026202 |

小学校国語教科書教材基礎研究

—「お手紙」の考察を通して—

A Researching Arnold Lobel through Japanese Language
Teaching Materials “The Letter”

大塚 浩¹

Hiroshi OHTSUKA

(平成30年11月16日受理)

ABSTRACT

Arnold Lobel (1933 -1987) was born in Los Angeles, Republic of United States of America. The first recorded example of his work “The Letter” ran in 1970 edition of Publishers by Harper & Row.

Later, in 1970, he had his first work, “The Letter” officially published. A fuller, revised version “The Letter” was included.

The main issues examined in the research of Arnold Lobel, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of “The Letter” and those in the school textbook version.

The textbook version of “The letter” was published by Kyouiku Publication and Mitsumura Publication in 1980. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 7 years or older and aged 8 years or older. Since 1980, the textbook has been reprinted a number of times.

はじめに

アーノルド・ローベル（1933～1987）は、1933年5月22日にアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスに生まれた。まもなくニューヨーク州のスケネクタディに移り、そこで育つ。少年時代は、病気がちであり、決して恵まれた生活を送ったわけではなかった。1951年、高等学校卒業後、ブルックリンの「プラッド・インスティテュート」に入学し、この頃からイラストレーションに興味を持ち始める。1955年、ポーランド生まれの同窓生アニタと結婚し、二人の子供を儲ける。妻のアニタは、ポーランドのクラクフ出身で、第二次世界大戦中、ナチスの手を逃れて各地を転々とし、戦後一家でアメリカ合衆国へ移住してきた。アニタ＝ローベルも、画家、絵本作家として有名であり、1985年にはアーノルド・ローベルが文章を、アニタ＝ローベルが絵を担当した『The Rose in My Garden』が出版されている。

アーノルド・ローベルが執筆した最初の絵本は、1962年に発表された『ミスター・マスタ

¹ 国語教育系列

一の動物園』であった。本書は、我が子であるアドリアンヌとアダムの二人のために書かれたものであった。翌年の1963年には、続編となる『ミスター・マスターの日曜日』を上梓し、ニューヨークタイムズのベストテン絵本に選出され、絵本作家としての地位を確立した。以後、60冊以上の絵本を執筆し、数々の賞に輝いている。1971年には、『Frag and Toad are Friend (ふたりはともだち)』でコルテゴット賞、全米図書館賞を受賞。1973年には、『Frag and Tad Together(ふたりはいっしょ)』でニューベリーを受賞。1974年には、自作の本に絵を描いた『どうぶつものがたり』でコルテゴット賞を受賞している。1987年12月4日、ニューヨークの病院で死去する。多くの人に愛されたアーノルド・ローベルの死に際し、リンカーンセンターで追悼の会が催された。

アーノルド・ローベルは、今も尚、現代アメリカを代表する絵本作家であり、代表作として『グレッグのけんぴ鏡』、『ごそごそねずみマーサ』等がある。日本語訳では、『どろんここぶた』、『ふくろうくん』、

『きりぎりすくん』等が翻訳絵本として広く人々に親しまれ、愛読され続けている。

小学校国語教科書教材としての「お手紙」は、昭和55年版の教育出版（小学校第1年用・下）並びに光村図書（小学校第2学年用・下）を緒として、以後長年掲載され続けている。日本書籍では、平成4年版から平成16年版まで小学校第2学年用・上に掲載され、大阪書籍では、平成12年版

から平成22年版まで小学校第2学年用・上に掲載されている。また学校図書では、平成17年版から小学校第2学年用上に掲載され、東京書籍並びに三省堂では、平成23年版から小学校第2学年用上に掲載されている。

そこで本稿は、「小学校国語教科書教材基礎研究」の一環として、アーノルド・ローベルの作品「お手紙」の考究を通して、作家アーノルド・ローベルと訳者三木卓、作品中における「お手紙」の機能と意義、がま君とかえる君の悲しみ、について考察を進めていくものである。

I. 作家アーノルド・ローベルと訳者三木卓

(1) 作家アーノルド・ローベル

アーノルド・ローベルは、自著である『Frag and Toad are Friend (ふたりはともだち)』を執筆した経緯について、次のように述べている。1)

ここで、私が「喜ぶ」と「楽しむ」ということばを使ったことを、強調しておきたい。私は、どの点から見ても、自分を教育者などとは思っていない。教育しなければならないというのならば、恐らく仕事を続けていくことはできなかつただろう。教えたり知識を与えたりしなければならぬのでは、仕事はきっとおさえつけられたものとなつただろう。教育のことは学校の先生に喜んでおまかせしたいものだ。とはいえ、それとうらはらの逆説も出てくる。さきに否定したにもかかわらず、私の作品は、確かに何らかの教育をしていることに気付く。「かえるくん」と「がまくん」の物語(『ふたりはともだち』『ふたりはいっしょ』)は、子どもたちに愛や友情についていろいろ教える。しかし、これは意図したことではなく、たまたまそういうふうになったにすぎない。二匹の水陸両棲類の物語を書く。二匹は互いに仲間であることを楽しみ、私も二匹について書きながらそれを楽しむ。それがすべてなのだ。その物語がいいものだとすれば、それはうまく組み立てられた話だからである。私の物語に対する考え方に付随して、たまたま教えることになるにすぎない。

ここでアーノルド・ローベルは、『Frog and Toad are Friend』における作品の中で「喜ぶ」と「楽しむ」という言葉を使用したことについて言及している。ローベル自身は、自らの作品の読者に対し、意識的に「教えたり知識を与えたり」することは苦手であるとしながらも、「私の作品には、確かに何らかの教育をしていることに気付く」と述懐している。さらに、『かえるくん』と『がまくん』の物語(『ふたりはともだち』『ふたりはいっしょ』)は、子どもたちに愛や友情についていろいろ教える。しかし、これは意図したことではなく、たまたまそういうふうになったにすぎない。」と述べている。

ローベルは、「二匹の水陸両棲類の物語を書く。二匹は互いに仲間であることを楽しみ、私も二匹について書きながらそれを楽しむ。それがすべてなのだ。」と述べ、二匹の水陸両棲類の「かえるくん」と「がまくん」、そして作者である自分自身との関係性を明らかにしている。つまり、ローベルが作品中で「喜ぶ」と「楽しむ」という言葉を使用するのは、作品の主人公である「かえるくん」と「がまくん」が、作者の手を離れ、物語の中で互いに仲間であることを実際に楽しみ、そして喜んでいるからなのであろう。書き手であるローベルは、「かえるくん」と「がまくん」についてのストーリーを描きながら、登場人物である「かえるくん」と「がまくん」の心の動きと呼応し、それと連動するようにそれを楽しみ、そして喜びながら作品を執筆しているのである。

さらにアーノルド・ローベルは、作品中の主人公たちについて、次のように述べている。2) かえるくんやがまくんは年も定かではなく、われわれの知らない世界の田舎のどこかに住んでいる。この二匹の紳士の振る舞いが、すべての人に共感されるようにと努力して書いていく。人間のおかれている社会的な枠をはずすことによって、すべての人に楽しんでもらえる本を作りたいと願っている。第三には、やはり動物を書くことが好きなのだ。まず実際に、自然の中にいる本物の動物の絵やスケッチからはじめ、次いで、物語にふさわしい性格作りをする。

(中 略)

動物のもともと持っている属性を保ちながら、別の要素も入れていき、その上に何かを付け加え、より人間化して、楽しいものにするのは意欲をそそられる仕事である。

ここでローベルは、「かえるくんやがまくんは年も定かではなく、われわれの知らない世界の田舎のどこかに住んでいる。」とし、作品中の主人公たちのプロフィールを明らかにしている。さらに、「二匹の紳士の振る舞いが、すべての人に共感されるようにと努力して書いていく。人間のおかれている社会的な枠をはずすことによって、すべての人に楽しんでもらえる本を作りたいと願っている。」と述べ、作品に対する思いを語っている。

ローベルの作品の登場人物が新鮮で生き生きと描写されているのは、何より作者であるローベル自身が常に真剣に作品と向き合い、主人公たちの一挙手一投足に留意した作品づくりを基盤に据えていたからである。だからこそ、作品中における「かえるくん」と「がまくん」の行動する姿は、いつも一生懸命で瑞々しい人物として描かれているのであろう。そこには、自分自身の仕事に誇りを持ち、作品中の登場人物に情熱を惜しみなく注ぎ込む作家としてのアーノルド・ローベルの矜持を看取することができる。

(2) 訳者としての三木卓

三木卓は、数多くのアーノルド・ローベル作品の翻訳を担当している。「お手紙」が収載されている『ふたりはともだち』シリーズをはじめ、『ふたりはいっしょ』シリーズや他の多くの作品の翻訳も手掛けている。

三木卓は、昭和 10 (1935) 年 5 月 13 日東京に生まれる。本名、富田三樹。昭和 12 (1937)

年に満州日日新聞記者である父と共に、一家で大連に移住する。帰国の途中で、父と祖母が亡くなる。昭和21(1946)年に父の出身地である静岡県御前崎に引き揚げる。昭和30(1955)年に早稲田大学第一文学部露文科に入学し、在学中に五木寛之、川崎彰彦らの雑誌「文学組織」に加わり、詩作を始める。昭和33(1958)年には雑誌「現代詩」に詩を発表、「現代詩の会」の結成に参加する。以後、活発な詩作・批評活動を続ける。

昭和39(1964)年頃から自らの満州体験を題材とした長編童話『ほろびた国の旅』(1969年・盛光社)の執筆に着手し、童話の仕事を継続的に始める。昭和41(1966)年に詩集『東京午前3時』(思潮社)を上梓、翌年の昭和42(1967)年に第17回H氏賞を受賞する。昭和44(1969)年に童話『時間の国のおじさん』(盛光社)、『星のカンタータ』(理論社)を発表する。昭和46(1971)年に『わがキディー・ランド』(思想社)で高見順賞を受賞。昭和48(1973)年には、「鶉(ひわ)」(連作『砲撃のあとで』の一編)で第69回芥川賞を受賞する等、三木の作品は幾多の賞に輝いている。童話、小説、詩集、評論のほかに絵本の翻訳も手掛け、幅広い分野で活躍している。

三木卓は、アーノルド・ローベルの作品「お手紙」について、次のように述べている。3)

『おてがみ』を一読された方は、ローベルの童心というべきものが、かえるくん・がまくんにかわいらしく生き生きと託されていることを楽しくうけとめるだろう。(中略)

そういうこどもらしい、自然な生きた心がおはなしの都合や何かでまげられないで出来ているのが、ローベル作品に共通する特質である。だから、生き生きと動物たちはとびはねるし、へまもする。してやったりとうれしがったりもするし、なかまのことを心配しもする。いずれもだれかにそうしなさい、そうあるべきだと強制されてそうしているのではない。主人公たちは、自分がそうになってしまうからそうしているだけなのであり、だからおもしろいのである。

ここで三木は、「ローベルの童心というべきものが、かえるくん・がまくんにかわいらしく生き生きと託されている」とし、作品「お手紙」の特長について触れている。さらに三木は、「そういうこどもらしい、自然な生きた心がおはなしの都合や何かでまげられないで出来ているのが、ローベル作品に共通する特質である」と評している。ローベルの作品において、「生き生きと動物たちはとびはねるし、へまもする。してやったりとうれしがったりもするし、なかまのことを心配しもする。いずれもだれかにそうしなさい、そうあるべきだと強制されてそうしているのではない」とし、作品中における主人公たちの会話や心情が自然な形で描写されている特徴を指摘している。

三木卓は、日本語特有の柔らかさを駆使しながら、読み手が作品の主人公である、「かえるくん」と「がまくん」の心情を想像しやすいよう言語表現の工夫を行っている。三木は、本作品の表題を「お手紙」と訳している。三木は、敢えて、物である「手紙」に敬称を付している。通常では、物である「手紙」に敬称を付して呼ぶことはない。しかしながら、「手紙」を「お手紙」とすることにより、読み手である読者にどこか可愛らしい、ソフトな印象を与えると共に、「かえるくん」と「がまくん」の二人にとって「お手紙」がとても大切な存在であることを伝達することに成功していると考えられる。本作品の表題である「お手紙」には、単なる「手紙」ではない、「かえるくん」と「がまくん」の二人にとって特別な「お手紙」であることに気付いて欲しいという、訳者である三木卓の願いを見て取ることもできよう。

II. 作品中における「お手紙」の機能と意義

(1) 手紙としての機能と役割

アーノルド・ローベルの作品「お手紙」は、手紙を巡るかえる君とがま君の掛け合いが展開されている。作品「お手紙」の冒頭は、次のように記されている。4)

がまくんは、げんかんの前にすわっていました。

かえるくんがやってきて言いました。

「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」

「うん、そうなんだ。」

がまくんが言いました。

「今、一日のうちのかなしいときなんだ。つまり、お手紙をまつ時間なんだ。そうすると、いつもぼく、とてもふしあわせな気持ちになるんだよ。」

「そりゃ、どういうわけ。」

かえるくんがたずねました。

「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」

がまくんが言いました。

作品「お手紙」では、冒頭部においては「がまくん」が、その後は「がまくん」と「かえるくん」の二人が、お手紙を待ち続けている。それ程、「かえるくん」と「がまくん」にとってお手紙は大切なものだったのである。では何故、彼らにとってお手紙は、それ程まで重要なものであったのであろうか。

西郷竹彦は、一般論としての手紙の条件について、次のように述べている。5)

形象の相関関係を考えるときに、手紙というものが、ものごと・事物の形象としてそこに入ってきます。そうすると、手紙というものは何か、ということをおさえる必要があります。手紙の本質といいます。手紙とは何か、です。手紙というのは、お互いが意思を通じ合うために言葉で語り合っているというのが普通です。けれども、言葉で語り合う、言葉で気持ちや考えや情報を、つまり意味を伝えることができない場合、遠く離れている場合に、郵便局を通して、第三者を通して、伝えたいメッセージを、つまり意味を文章化して、それを相手に届けて読んでもらいます。それが、つまり手紙というものなのです。手紙というのは、お互いが言葉で語り合えない条件のもとにあるときに、手紙という方法を使って、手段を使ってコミュニケーションをはかるのです。つまり、情報の伝達、メッセージの伝達、言葉を言い換えていけば意味を伝えるということになるわけです。これが手紙なのです。これが手紙の本質です。

もちろんその手紙は、当然すみやかに、確実に相手に届けられることが条件として望ましいわけです。何日も何日もかかっていたのでは困ります。それから相手のところに届かないで、よそにいつてしまう誤配、これも困ります。こういうことも起こりかねません。確実に相手に届く、すみやかに確実に届くことが条件として必要です。

ここで西郷は、「言葉で語り合う、言葉で気持ちや考えや情報を、つまり意味を伝えることができない場合、遠く離れている場合に、郵便局を通して、第三者を通して、伝えたいメッセージを、つまり意味を文章化して、それを相手に届けて読んでもら」うものとして、手紙の言語規定を行っている。さらに、「当然すみやかに、確実に相手に届けられることが条件として望ましい」と、手紙の配達条件についても説明している。

また、本作品の訳者である三木卓は、手紙の持つ役割について、次のように述べている。6)

「おてがみ」の魅力は、手紙というもののふしぎな力にも大いにかかわっています。昔から手紙というものはありました。それは要件や情報を伝えるものとしても役立ちましたが、人の心と心をつなげる超越的な力としても大いに働いてきました。例をあげるまでもないでしょ

う。

子どもたちが、この作品を愛してくれるのは、かれらもまた、すでに手紙のすばらしさを知っているからだと思います。人と人の通い合いというもののすばらしさを知り、欲しているとき、手紙はすばらしい役割を果たしています。

三木は、「昔から手紙というものはありました。それは要件や情報を伝えるものとしても役立ちましたが、人の心と心を結びつける超越的な力としても大いに働いてき」たことを指摘し、手紙の持つ「ふしぎな力」について触れている。さらに、読者である子どもたちが、「この作品を愛してくれるのは、かれらもまた、すでに手紙のすばらしさを知っているからだ」思います。人と人の通い合いというもののすばらしさを知り、欲しているとき、手紙はすばらしい役割を果たすと述べている。

つまり、作品「お手紙」の中には、三木の指摘する手紙の有する「人の心と心を結びつける超越的な力」が十全に描かれているのである。それ故、この作品の読者は、「手紙のすばらしさ」や「人と人の通い合いというもののすばらしさ」に、共感することができるのではなからうか。作品中において主人公たちが手紙を待っているがま君とかえる君の細やかな心情描写が多く、彼らの手紙を待ちわびる気持ちがクローズアップされているのは、手紙を待ち続けている人にしかな味わうことのできない、「待ち望んだ手紙が到来することの幸せ」を最大限に表現しようとしたためではないだろうか。

(2)作品の中の「お手紙」の意義

跡上史郎は、本作品における手紙について、次のように述べている。7)

先に見たように、がまくんはゆうびんうけにお手がみが運ばれてくるのを待っている。かえるくんが口頭で「しんゆう」だと言ったりするわけでも、お手がみを手渡しするわけでもないという事情も勘案してみると、ここで必要とされているのは、どうやら、私たちの世界における郵便制度、あるいはそれに近いような慣習に基づくお手がみらしいということが見えてくる。つまり発信者がいて、それが郵便配達人によって媒介され受信者に届くという確立された手続きに則った形でのお手がみである。

跡上は、作品中の手紙を「発信者がいて、それが郵便配達人によって媒介され受信者に届くという確立された手続きに則った形」として把握している。がま君は、かえる君との会話の中で「毎日、ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。手紙をまっているときがかなしいのは、そのためなのさ。」と発言し、自分の家の「ゆうびんうけ」に、手紙が届いて欲しいという思いを言葉にしている。

その後、かえる君は、出会ったかたつむり君に対し、「おねがいでけど、この手紙をがまくんの家へもって行って、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」と話し、直接がま君への手渡しでなく、念を押すように「ゆうびんうけ」という場所指定を行っている。さらに、再びがま君の家に戻ったかえる君は、ベッドで昼寝をして塞ぎ込むがま君に話し掛けながら、「かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。」と窓外の「ゆうびんうけ」の様子を窺っている。ここでもかえる君は、「ゆうびんうけ」に手紙が到着することへのこだわりを見せている。つまり、かえる君は、がま君が「ゆうびんうけ」に届けられる手紙を待ち望んでいることを諒解していたと考える。だからこそかえる君は、自分の認(したた)めたがま君への手紙を、敢えて第三者であるかたつむり君に配達人役を依頼したのであろう。

また、甲斐睦郎は、がま君の手紙への願望について、次のように述べている。8) この「お手紙(を)もらったことのないことがふしあわせな気持ち」になるという説明は、論理を大切

にする大人には納得がいけないかもしれないが、幼い子どもの心をよくつかんだとらえ方になっている。家族にたくさんの手紙が届くのに、どうして自分にお手紙が届かないのだろう。一度でいいから本当のお手紙が欲しいという子どもの願いを大人はもう忘れてしまっている。例えば、四十年間郵政省の月刊雑誌『郵政』に掲載されたエッセイ六四編をまとめた『ベストエッセイ ことばの宝石箱』（ぎょうせい 一九九〇）に載る立原えりかの「はじめての手紙」を紹介しよう。六歳になる筆者の愛娘が毎日のように郵便屋さんに自分宛の手紙が届いていないか尋ねる、筆者が書いてやっても、本物の手紙でなければ承知しない、あるとき旅行先から娘に出した手紙を喜んでくれたという話である。この六歳の少女の願いとがまくんの願いは共通している。そこで、すでに述べたように、このがまくんの気持ちを子どもたちの思いと関わらせない扱いで授業を進めようとする、浮薄な展開になる恐れがある。

（中 略）

がまくんは、悲しい声でぼくにお手紙をくれる人がいないことを訴える。文字で記された手紙は会話とともに人々の心の交流を図る大切な手紙である。特に遠く離れた人との会話であるということができる。また、手紙は、繰り返し読むことができるし、保存もできる。そういう意味で、手紙の価値ははかり知れないものがある。一人暮らしのがまくんにとって、他の人との大切な心の交流の手段であるお手紙が切実な問題として取り上げられているのである。

ここで甲斐は、『「お手紙（を）もらったことのないことがふしあわせな気持ち』になるという説明は、論理を大切にする大人には納得がいけないかもしれないが、幼い子どもの心をよくつかんだとらえ方になっている。家族にたくさんの手紙が届くのに、どうして自分にお手紙が届かないのだろう。一度でいいから本当のお手紙が欲しいという子どもの願いを大人はもう忘れてしまっている。」とし、これまで一度も他者から手紙を貰ったことのないがま君の心境に焦点を当てた本作品のテーマを、「論理を大切にする大人には納得がいけないかもしれないが、幼い子どもの心をよくつかんだとらえ方」であると分析している。

続けて甲斐は、「このがまくんの気持ちを子どもたちの思いと関わらせない扱いで授業を進めようとする、浮薄な展開になる恐れがある。」とし、作品中のがま君の気持ちと読者である児童の思いを関連させながら授業研究を進めることの重要性を説いている。

ここで着目したいのは、作品中のかえる君とがま君は、決して物理的に遠く距離を隔てた場所に居住している訳ではないという点である。寧ろ、かえる君とがま君は、物理的にも近距離に居住しており、日常生活においても一緒に行動をともし、共通の時間を過ごす間柄である。そのような関係性にあるかえる君から貰った手紙を、がま君は心の奥底から喜んだのである。それは、決して初めての手紙が届いたことに因るものだけではなかったのではなかろうか。

Ⅲ. がま君とかえる君の悲しみ

(1) がま君の悲しみ

何故がま君は、お手紙の届くことを、それ程までに待ち望んでいたのでしょうか。ここでは、がま君の悲しみは、何に起因するものなのかについて考察していきたい。

斉藤美加は、がま君の悲しみについて、次のように述べている。9) 最初のセリフから分かるのは、がまくんは、待っているのに手紙が来ないのが悲しい、とっているわけではないということです。がまくんには一日のうちで悲しみにひたる時間帯が日課としてあり、今がその時間帯だ、というのです。この、もってまわった説明の仕方は何でしょう。来ない手紙を待つ

からという理由づけは、二次的、付随的なもののように響きます。もし手紙が来てしまったら、がまくんはまた新たな悲しみの種を見つけて、この悲しみの時間帯に理由としてあてはめるのではないかとも思えます。また、「手紙をまっているときがかなしいのは、そのためなのさ。」という原文を直訳すると「そういうわけで、手紙を待つ時間帯は自分にとっては悲しい時間だ (That is why waiting for the mail is a sad time for me.)」となり、手紙が来ない状況を、がまくんは一日中悲しんでいるわけではなく、他の時は気にしていないと言っているように取れます。一日の大半は気にしていないけれど、ある一定の「悲しむ時間」というのがあるのだということ、自分ではっきり意識しているのです。そして悲しくなるのがいやなら、手紙を待つこと自体をやめればよいのに、がまくんは敢えて期待して失望する日課を繰り返しているように聞こえます。手紙が来ないと悲しみに半分は浸りながら、半分の意識はそんな自分を外側から見て自己憐憫に浸るのを楽しんでいるという自意識のありようが何か芝居じみた空間を生み出しています。 (中 略)

前述したように、悲しみの快樂という要素が読み取れるのが一つ。さらには一般に「手紙が欲しい」という場合、誰か特定の人からの手紙が欲しいという具体が「欲しい」の中身としてある場合と、ただ手紙を受け取るという行為を体験したいという二通りが考えられるでしょう。先ほどの引用でのがまくんの説明から伝わってくるのは後者、つまり誰かが一この物語の世界でがまくんに手紙をくれそうなのは、かえるくん以外にいないのですが一手紙というものを自分に送って欲しいということです。

ここで斎藤は、作品の冒頭部における「今、一日のうちのかなしいときなんだ。つまり、お手紙をまつ時間なんだ。そうなるよ、いつもぼく、とてもふしあわせな気持ちになるんだよ。」というがま君の発言に着目し、「がまくんは、待っているのに手紙が来ないのが悲しい、とっているわけではないということです。がまくんには一日のうちに悲しみにひたる時間帯が日課としてあり、今がその時間帯だ、というのです。この、もってまわった説明の仕方は何でしょう。」と疑問を投げ掛けている。

果たして、この場面のがま君の発言は、「もってまわった」言い方なのであろうか。がま君の発言はかえる君の「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」という問いかけに対し、「うん、そうなんだ。」と応えた上での発言である。「どうしたんだい」、「きみ、かなしそうだね。」と問われたから、「うん、そうなんだ。」と、素直な気持ちで返答したに過ぎなかったのではなからうか。がま君の「今、一日のうちのかなしいときなんだ。つまり、お手紙をまつ時間なんだ。そうなるよ、いつもぼく、とてもふしあわせな気持ちになるんだよ。」という応答は、がま君の悲しみの大きさを表現していると考えられる。「今、一日のうちのかなしいときなんだ。」と発言するがま君の心の内には、毎日毎日、時間の経過の中で「昨日もお手紙は来なかった。でも今日こそ、来るかもしれない。」という絶望と期待を繰り返しながら只管待ち続ける寂寥感が見て取れる。それは、ただの日課ではなく、日々萎えた心を奮い立たせながら、玄関の前に座って手紙の到着を待つ時間であったのではなからうか。

跡上史郎は、がま君にとっての手紙について、次のように述べている。10) さらに、お手がみはその内容もさることながら、それをやりとりすること自体に意味があるのだという発想を加味してみよう。まず、がまくんが抱えているのは、お手がみのやりとりをするという、社会的に他の人びとが共有している制度に参画したいという希望ではないだろうか。そして、がまくんのかなしみは、そのような制度から自分が除外されているというところに起因しているということになるのではないだろうか。お手がみがもらえないことで、言葉遣いまでなげやりに

なってしまう、ちょっと甘えん坊のがまくんだが、その裏側にはちゃんと社会的コミュニケーションへの志向が隠されていたのだ。

跡上は、「がまくんが抱えているのは、お手がみのやりとりをするという、社会的に他の人びとが共有している制度に参画したいという希望」があったのではないかと問題提起している。そして、「がまくんのかなしみは、そのような制度から自分が除外されているというところに起因している」とし、そこには「社会的コミュニケーションへの志向が隠されている」と捉えている。

(2) 「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」

ここでは、「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」というがま君の発言に着目して、考察を進めていきたい。作品本文では、この場面について、次のように記している。

11)

そりゃ、どういうわけ。」

かえるくんがたずねました。

「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」

がまくんが言いました。

「一どもかい。」

かえるくんがたずねました。

「ああ。一ども。」

がまくんが言いました。

「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。毎日、ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。手紙をまっているときがかなしいのは、そのためなのさ。」

二人とも、かなしい気分で、げんかんの前にこしを下ろしていました。

すると、かえるくんが言いました。

「ぼく、もう家へかえらなくっちゃ、がまくん。しなくちゃいけないことがあるんだ。」

かえるくんは、大いそぎで家へかえりました。

がま君の「だれも、ぼくにお手紙なんかくれてことがないんだ。」という発言には、「お手紙なんか」という半ば諦めたような言葉が認められる。がま君が、玄関の前に座ってお手紙を待つことに飽き飽きしているこの場面では、「だれも、ぼくにお手紙なんか」ではなく、寧ろ

「だれも、お手紙をぼくになんか」と表現する方が、自然な表現とも受け取れる。アーノルド・ローベルの原作である英文と比較してみたい。原作では、「No one has ever sent me a letter.」と表記されており、「お手紙」に続く「なんか」という表現を示す英文は見当たらない。つまり、原作である英文にはない、訳者である三木卓独自の言語表現であると言えよう。

この言語表現について考察を進めると、がま君の次の言葉である「手紙をまっているときがかなしいのは、そのためなのさ。」との関連に着眼する必要がある。原作である英文では、

「That is why waiting for the mail is a sad」と表記されている。「the mail」という表記に着眼したい。訳文では、「手紙」と表現されている。がま君の先の発言では、「a letter」という表記を使用しているが、続くがま君のこの発言では、「the mail」という表記を使用している点がそれである。つまり、訳者である三木卓は、「a letter」を「お手紙」、「the mail」を「手紙」と訳し分けているのである。

井上幸子は、本作品における「the mail」と「a letter」の言語使用の相違について、次のように述べている。12) 英文には「the mail」とともに、「a letter」も使われている。郵便物一般を

意味する「the mail」に対し、差出人と受取人を意識する「a letter」。日英ともに「the mail, a letter, the letter」「てがみ、お手紙」は、高頻度の語であり、さらに作品の題名にも用いられていて、作品のキー・ワードとして扱いたい。

ここで井上は、作者であるローベルが原作である英文において、「the mail」と「a letter」の両者を使用している点を指摘した上で、「郵便物一般を意味する『the mail』に対し、差出人と受取人を意識する『a letter』として、「the mail」と「a letter」の相違について言及している。ローベルは原作である英文において、がま君の「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」という翻訳部分を「No one has ever sent me a letter.」と記しており、「差出人と受取人を意識する」ことを意図した言語表現である「a letter」を使用しているのである。

ここで再度、がま君の「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」という発言について論を進めたい。がま君の「だれも」や「くれた」という表現からは、自分に対し手紙を書いてくれる人の存在を念頭に置いた言語使用であることを窺い知ることができよう。また、「ぼくに」という表現からは、がま君自身だけに宛てられた手紙を想定していることを推測することができる。

がま君の「手紙なんか」という言語使用は、「だれも」、「くれたことがないんだ」と合わせて考えると、自分自身に手紙をくれる存在がないことを悲観している発言であると推し量ることもできよう。がま君は、自分宛の手紙を貰うことによって、「自分自身を心配し、大切に思ってくれている他者の存在」を確認すると共に、その存在を実感したかったのではなかろうか。がま君は、その後のかえる君との会話の中においても、「ぼくに手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」「今まで、だれもお手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ。」と、頻りに自分自身に手紙をくれる人の存在を気にしている。がま君は、自分宛の手紙が届かないこと＝自分自身を心配し大切に思ってくれている人が誰一人いないのではないかと、思い込んでしまっていたのでないだろうか。当初は、形式的な繋がりを求めて手紙を待っていたがま君であったのだが、手紙を待ち続けるうちに誰一人自分に手紙をくれる人がいないことが、事実として明らかになってきたのである。

つまり、がま君の願いは、自分宛の手紙をただ貰うことから、他者である誰かとの固い絆を確認したいということに次第次第に変容していったのではなかろうか。がま君にとっての自分宛の手紙とは、自分自身に気遣いを示してくれる大切な存在である他者との固い絆を象徴するものなのである。

(3) かえる君の悲しみ

ここでは、がま君とかえる君が、「二人とも、かなしい気分で、げんかんの前にこしを下ろしてい」る場面について、考察を進めたい。

渡邊友子は、この場面について、次のように述べている。13) がまくんの悲しみに共鳴したかえるくんが、がまくんと一緒に玄関に座っていることで、がまくんと悲しみを分かち合おうとする姿が描かれている。がまくんは、自分の悲しみにひたって沈み切っている。かえるくんはがまくんの悲しみを知りながら何もしてやれない自分を顧みて悲しい。ここでは、がまくんに対して十分にやさしい心遣いのできる親友としてのかえるくんがいる。

ここで渡邊は、この場面では「がまくんの悲しみに共鳴したかえるくんが、がまくんと一緒に玄関に座っていることで、がまくんと悲しみを分かち合おうとする姿が描かれている。」と捉えている。がま君は、今日もまたお手紙が届かないため、「自分の悲しみにひたって沈み切」りながら玄関の前に腰を下ろしている。一方、その傍らでかえる君は、「がまくんの悲し

みを知りながら何もしてやれない自分を顧みて悲しい」思いで腰を下ろしていると渡邊は考えている。

これまでの先行論文を見ると、一度も自分宛のお手紙を貰ったことのないがま君の悲しみに共鳴・同情・共感して、かえる君と一緒に「二人ともかなしい気分で」腰を下ろしている、という考察が少なくない。作品中における「二人とも、かなしい気分で、げんかんの前にこしを下ろしていました。」という一文は、国語教室の学習者と共に「がま君の悲しみ」と「かえる君の悲しみ」について、熟考する価値のある文章表現であると考えられる。

果たして、かえる君の悲しみは、手紙を待つがま君の悲しみに共鳴・同情・共感したからだけなのであろうか。かえる君は、今日初めてがま君に打ち明けられ、これまで自分宛のお手紙を貰ったことのないがま君の悲しみに接した。がま君は、毎日毎日、絶望と期待を繰り返しながら、今日こそお手紙が来るに違いないと萎えた自ら心を奮い立たせながら、お手紙を待つ悲しい時間を過していたのである。かえる君は、これまでがま君と密接な友人関係を築いてきたと自負していたはずである。しかしながら、それはかえる君の一方的な思い込みに過ぎなかったのである。

なぜならば、もしかえる君が、がま君の真の友人であるならば、がま君の悲しい、そして苦しい胸の内を把握し・理解してあげていたはずだからである。かえる君は、がま君の深い悲しみを理解できていなかった「自分自身の不甲斐なさ」に落胆し、「悲しい気分で」がま君の傍らで座り込んでいたのではなかろうか。かえる君の「悲しい気分」とは、自分自身にとって最も大切な友人であるがま君が、日々、お手紙を待つ辛く悲しい時間を過ごしながら、毎回期待を裏切られて悲嘆に暮れていた寂寞たる姿に何故気づけなかったのか、という自責の念に駆られていた時間であったのではないかと考えるのである。

【引用文献】

- 1) アーノルド・ローベル稿「三宅興子訳『私の絵本づくり』、『叢書児童文学 第二巻 絵本の時代』、世界思想社、昭和54(1979)年、213頁
- 2) 上掲書1)の文献、215頁
- 3) 三木卓稿「自然の心をそのままに」『教師用指導書 小学校1年』、教育出版株式会社、昭和55(1980)年
- 4) 『わたしたちの小学国語 2上』、日本書籍株式会社、平成8(1996)年1月25日、26～27頁
- 5) 西郷竹彦著『意味を問う教育—文学教材をゆたかに、深く読む—』、明治図書出版株式会社、平成15(2003)年、203頁
- 6) 三木卓稿「心の通うあう世界」『国語の授業』162号、一光社、平成13(2001)年2月、5頁
- 7) 跡上史郎稿「『ない』ことにまつわる『ふしあわせ』と『しあわせ』—アーノルド・ローベル『お手紙』について—」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編1年』、教育出版株式会社、平成13(2001)年3月、52頁
- 8) 甲斐陸郎稿「『お手紙』の表現—キーワードに着目して—」『実践国語研究別冊』第110号、明治図書出版株式会社、平成3(1991)年、158～159頁
- 9) 斎藤美加稿「アーノルド・ローベル『ふたりはともだち』の文学性」三浦和子・川

端康雄編『絵本が語りかけるもの ピーターラビットは時空を超えて』、松柏社、平成 16
(2004) 年、164 頁

1 0) 前掲 7)の文献、52 頁

1 1) 前掲 4)の文献、27～28 頁

1 2) 井上幸子稿「THE LETTER 『お手紙』—英文と日本文の表現の特徴—」『実践国語
研究別冊』

110 号、明治図書出版株式会社、平成 3 (1991) 年、297 頁

1 3) 渡邊友子稿「小学校二年 お手紙」渋谷孝編『授業のための全発問四 小学校二年
文学教材—スイミー・お手紙—』、明治図書出版株式会社、平成 3 (1991) 年、112 頁